

叔 MOMI



粗痕のある土器
(表紙裏参照)

目 次

創刊にあたって

宮城県高清水町萩田遺跡出土の

初期弥生土器……佐藤 信行…1

宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器…太田 暉夫…10

宮城県柴田郡村田町中の内遺跡について…佐々木安彦…20

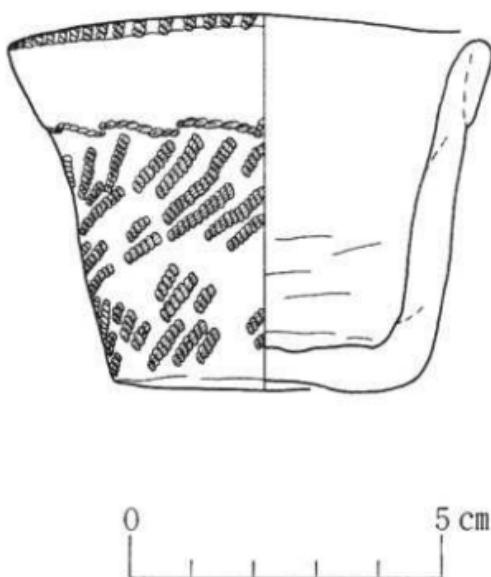
宮城県に於ける弥生時代の住居跡、石器、埋葬址集成…小川 淳…22

弥生時代遺跡地名表(村田町編)……………29

創刊号

1979

弥生時代研究会



模痕のある土器No.1

岩沼市長岡遺跡出土のものである。器高は6.1cm、口径は8.7cm、底径は4.8cmである。色調は、内外面とも暗褐色を呈する。胎土には粗砂粒が多く含まれている。器面は内外とも凹凸があり、特に内部底面はそれが著しい。器形は体部からほぼ直立ぎみに立ち上がる。口縁部はやや肥厚している。文様は、口縁部と体部にL-Rの単節斜繩文が施されている。また口縁部と体部の境には縦絡文が施されている。外而底部と内面は細なミガキが施されている。底部から約1cm上位で模の压痕が認められた（表紙写真的矢印）。土器は太田が保管している。なお、以前に本土器は、太田によって宮教考古第6号に紹介されている。（太田 昭夫）

創刊にあたって

宮城県における弥生時代の研究は、故山内清男氏によって開始された。その後、伊東信雄氏は、東北地方の弥生時代研究に精力的に取り組まれ、その大系を確立された。その中で宮城県下の弥生文化の基礎を築かれた。時に1950年の後半のことである。その後、伊東氏、伊藤玄三氏、興野義一氏、須藤隆氏等によって、さらに研究は進められてきている。

1970年代後半になって、近隣諸県の弥生文化研究は大いに進み、宮城県の弥生文化研究は時宜に適さない面もあることが一部で指摘されるにいたっている現状である。

我々は、宮城県の弥生文化研究にたずさわって、まだ日も浅いが、お互いに勉強を重ねながら、先学から引き継いだ業績をさらに発展させることを志し、弥生時代研究会を設立した。

本会の活動内容は、会規約にも示したが、基礎的作業（資料の公表、遺跡地名表、文献目録の整備、既公表資料の見直し等）を通して、宮城県の弥生文化を正しく認識し、弥生土器の編年を確立し、究極においては宮城県の弥生時代社会を究明することにある。

我々の活動は、各会員の公務の合間に行うなどから、牛歩に似た活動になるかもしれない。しかし、活動は停止することなく、細く、永く続けたいというのが我々の願いである。

宮城県の弥生時代について興味をお持ちの方々の積極的な御参加を期待して創刊の辞としたい。

機関誌「糲（MOMI）」の創刊は、我々の活動の第一歩である。「糲」の名称は、初期農耕文化のメルクマールである稻作＝米から名づけた。弥生時代人にとって、糲とはまさに死活にかかわるものだったと思われるからである。

1979年 5月

発起人一同

宮城県高清水町萩田遺跡出土の初期弥生土器

佐藤 信行

1

萩田遺跡は、国道4号線、古川、高清水のほぼ中間、宮城県栗原郡高清水町上萩田77、81に所在する。

遺跡は、古川市荒谷地区から連なる浅い丘陵帶の一角に位置し、西向きの丘陵麓に営まれている。向い側の丘陵との間に、透川によって形成された細長い湿地帯が形成されている。現状は水田である。

2

萩田遺跡は、昭和20年代後半に行われた開田工事によって発見され、遺物の一部が高清水中学校及び高清水公民館に収納された。昭和29年同町公民館を訪れた興野義一氏が、所蔵されていた遺物の中に太型鉈刀石斧を発見し、萩田遺跡の存在を確認された。更に同遺跡を調査され出土土器等から、萩田遺跡が弥生時代初期の福浦島下層式に属する遺跡である事を発表された（興野：1976）。



昭和32年、伊東信雄氏によって、弥生時代初期大泉式遺跡として『宮城県史』に紹介され著名となつた。当時、県内で既知の弥生時代初期の遺跡は、萩田遺跡を含めて4遺跡にすぎない(伊東:1957)。

昭和35年、同氏による「東北北部の弥生式土器」では、棚倉式期の遺跡として宮城県分は11ヶ所が記載されている(伊東:1960)。

昭和47年、筆者は栗原郡内の弥生式遺跡と遺物について概説し、本資料の一部を写真で示した(佐藤:1972)。

昭和51年、興野義一氏は『高清水町史』の中で「縄文時代直後の萩田遺跡」として萩田遺跡発見のいきさつ、当時の弥生時代研究の一端にふれ、土器片と磨製石斧の写真を掲載された(興野:1976)。

3

ここに紹介する遺物は平箱一箱弱である。内訳は、石器が3点の他は、すべて土器片である。土器には大形の破片も数点あるが、大部分は小破片である。

土器は以下紹介するように、いずれも宮城県地方の初期弥生式に比定できるものが大部分で明確に大洞A'式、樹形圓式に比定できるものはない。極めて短期間に営まれた遺跡として貴重である(註1)。

土器の成形等

〔成形〕土器成形の実際にについて知り得る資料は少ないが、第2図34、37、第3図1、3の内面には、巾2~3cmの粘土紐の接合痕が観察される。これらは、恐らく粘土紐積上げによる成形を物語るものであろう。

〔器面調整〕外面は、ほとんどミガキかナデによって行われているらしい。内面も、ミガキやナデによって行われているものが多い。ケズリや指圧痕の痕跡をとどめるものもある。

〔色調〕褐灰色、暗赤褐色、暗褐色、暗灰色、褐色、黒褐色、赤褐色、淡黄褐色、白褐色等を呈する。磨消褪文を有する土器群が、赤褐色等の明色を呈する以外、一般に暗い色調を呈するものが多い。器内、外面に炭化物の付着するものは極めてまれである。

〔胎土〕第3図2、3は水流しの粘土を思わせる緻密な胎土であるが、他はいずれも粒の大、小はあっても砂を多く含む。ただ傾向として全面縄文の深鉢と沈線文を持つ高杯、鉢等を比較すると、前者がやや粗荒な粘土を使用している事は言える。

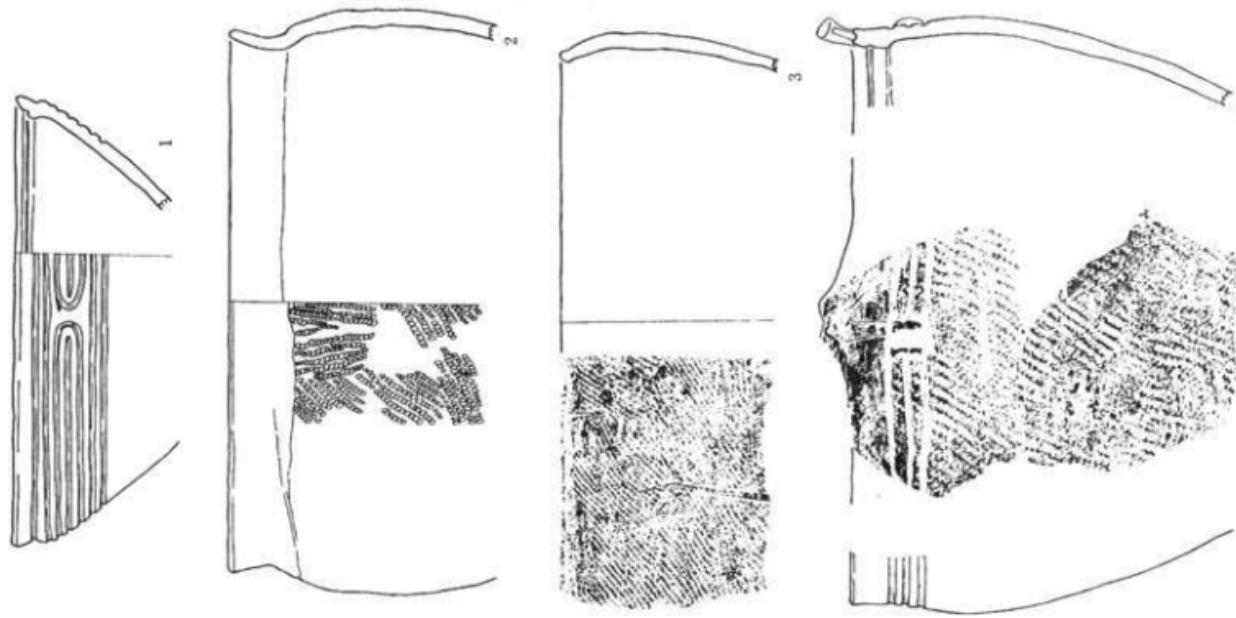
次に、器形毎に分類し、更に文様表現技法及びモチーフ等から細分した。

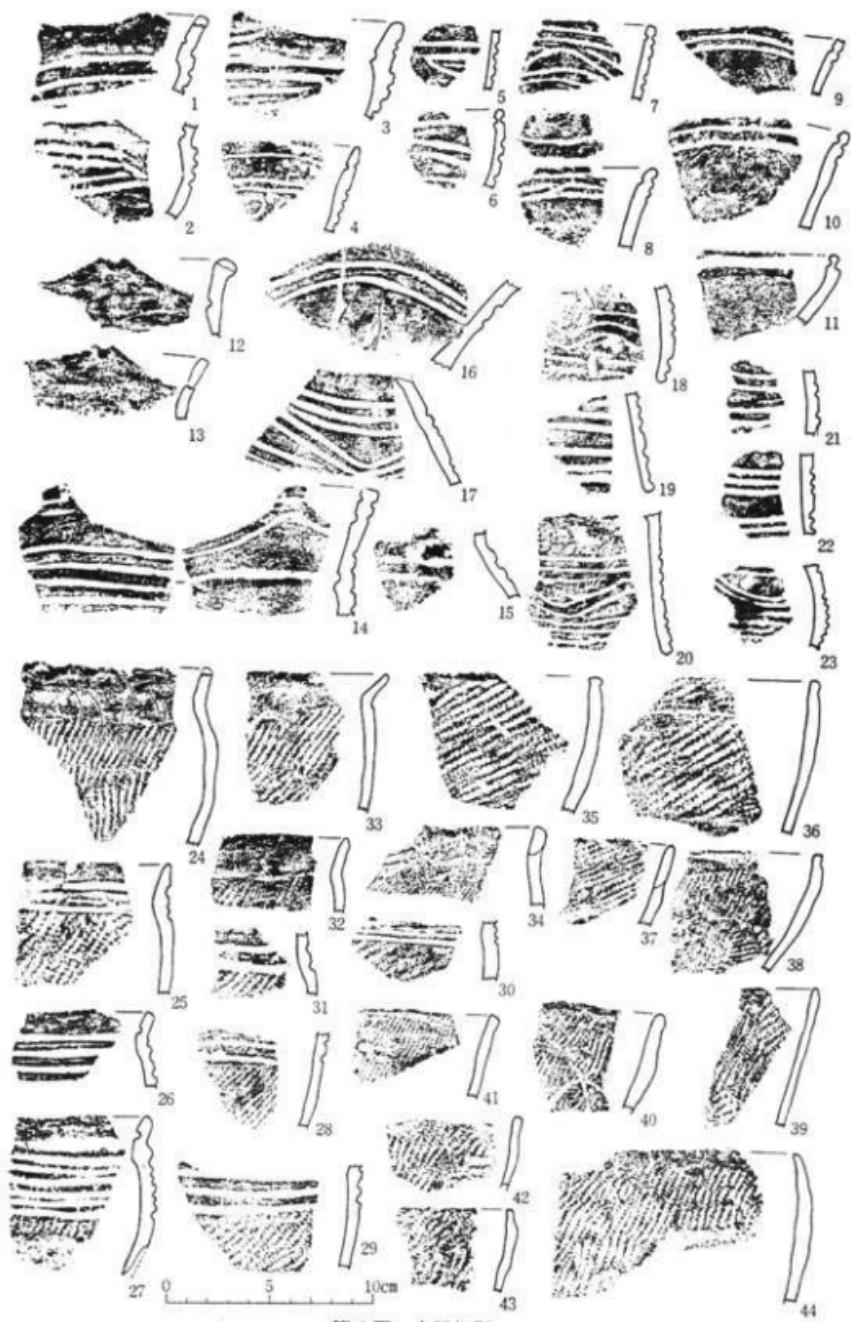
高杯、(第2図1~3、11~13、16~23、42)

10cm

J

第1圖 土器測量圖





第2図 土器拓影

1類：縄文を欠き、沈線文を主体とする一群。口縁は、ほとんど波状を呈し頂点は二叉されるか、又は突起が付けられる事が多い（1～3、12、13）。坏部は、口縁で屈曲し、体部に丸味を持って移行する。台部は直線的に開くものが多く（17、19～22）、台部中央でふくらみ、台端部で内屈するものもある（18、23）。

模様は、坏部では太い沈線により、口縁屈曲部から体部中位にかけて変形工字文が描かれる。内面や、まれに口唇部にも沈線がめぐる。

台部では、2～3条の平行線文の中間に2条の平行沈線により波状文の描かれるものが多く（17、18、20、23）。2～3条の平行沈線のみで構成されるものもある（22）。

2類：坏部は口縁に向って直線的に開く。口縁に一条の太い沈線により段を形成するのみで口縁内面にも一条の沈線がめぐる（11）。

3類：平縁で坏部は口縁下部でわずかに膨みをもつ。全面に縄文を充填する。口縁上部内面に炭化物が付着する（42）。

鉢、（第1図1、第2図4～10、37～39、41、第3図5、8）

口縁はほとんどが直行して開く単純な形態で軽く内擣するもの（6）膨みをもつもの（38）もある。文様表現の相違から次の3類に細分する。

1類：口縁から体部上半にかけて、平行線文（8～10）、変形工字文（4、5、7、第1図1）波状文（6、7）等の沈線文のみによって構成されるもの。口縁内面に一条の沈線をもつ。

2類：区画した沈線文の内部又は外部に縄文を充填する磨消縄文手法によるもの（第3図5、8）。

3類：全面に縄文を充填するもの（37、39、41）

甕、（第1図2、4、第2図24～34）

1類：口縁が外反し、全面に縄文が充填されるもの（第1図2、第2図24、32～34、第3図11～12）、口縁は強く外反するものは少く（33）ゆるやかに外反するものが多い。縄文は、全面に左傾する縄文が充填されるが、口縁の外反部分は、いずれもミガキにより無文となる。口唇部に刺突文をもつものがある（34）。

2類：口縁が外反し、口縁部に2～6条の平行沈線がめぐるもの（第2図25～31）。沈線文は、縄文を回転施した後、その部分を擦り消して沈線文を描いている。沈線部分の擦り消しは極めて荒く行われたらしく、應々にして縄文が残る。第1図4は、波状口縁を呈し、口縁部に3条の平行沈線を巡らし、波状口縁の頂点とほぼ対応する位置で沈線を切断し、両端に隆点を附加している。口唇に一条、内面に二条の沈線が巡る。

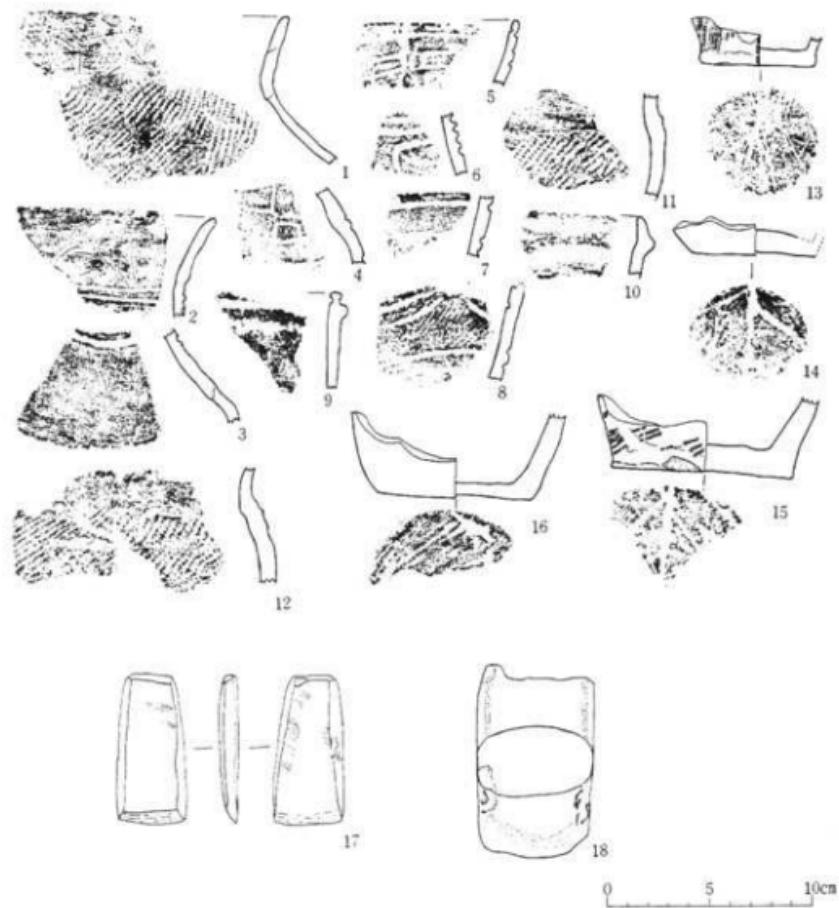
3類：口縁は内擣気味に立上がる全面縄文のもの（第1図3、第2図35、36、43、44）。縄文晩期の深鉢と同類である。

壹、(第3図1~4、9、10)

個体数は少ないが、バラエティーに富む。

1類：甕1類と同じ特徴を有するもの（1）。

2類：頸部からゆるやかに外反して口縁に至る。頸部から体部にかけては（3）とほぼ同じ形態をとると思われる（2）。頸部には2条+ α の沈線が巡り、沈線文帯内部には細繩文が施されるらしい。（3）は頸部に一条の太い沈線が巡り、以下無文である。内面は、ケズリによって器面調整されているが、成形～整形の際の粘土積上げや指頭による圧痕の痕跡が残る。



第3図 土器拓影、石器実測図

3類：無文で、口縁上部に一条の隆帯が巡るもの（9、10）。本類は、他遺跡の類例から見て、大形の無文壺に直立してつく口縁部であろう。

底部、第3図13～16

(13、14)は、底部に繩文を、底面に木葉痕を施された鉢又は壺の底部である。(14、16)は底部付近が無文で、底面に木葉痕、その他の圧痕（16）をとどめる壺又は壺の底部であろう。

石器

萩田遺跡出土の石器とされるものに元高清水中学校所蔵品2点、高清水町公民館所蔵1点、計3点の磨製石斧がある。後者については写真が掲載され、大型蛤刃磨製石斧として紹介されている。前者については、筆者が1966年頃、高清水中学校で実見し、簡単なスケッチをした。その後、再度同校を訪問した際、遺物は紛失して実見する事ができなかった。従って、不完全な以前のスケッチにより、石器の概略を述べる。

第3図17は、全長7.5cm、最大幅3.4cm、厚さ0.9cmの短冊状を呈する扁平片刃の磨製石斧である。両面は入念に研磨され、両面及び頭部は面取りされる。刃部に使用痕はほとんど認められない。両面に部分的に擦痕が残る。

第3図18は、頭部が欠損する。現在長9.5cm、最大幅5.7cm、厚さ3.4cmを計る大型の石斧である。両側に2次工程の敲打痕を残し、背面には擦痕が認められる。刃部に使用痕が認められる。

石質及び色については、両例とも註記がなく不明である。以上の不備なスケッチと觀察によても、その有する特徴から、17が扁平片刃石斧に、18が大型蛤刃石斧に同定することができよう。「高清水町史」及び筆者のスケッチによって、萩田遺跡から出土した土器は、扁平片刃石斧1点、大型蛤刃石斧2点となる。他に、石鎌等の打製石器類の出土があったかどうかは、現物及び当時の出土遺物に関する記録が一切存在しないため不明である。

4

3章に述べた萩田遺跡出土の土器の特徴を要約すると、

1. 器形には高環、鉢、壺（深鉢も含む）、壺がある。
2. 文様表出技法には、沈線によるものと磨消繩文によるものがあり、前者が圧倒的に多い。その比は、約10:1である。
3. 沈線文には変形工字文、波状文、平行線文がある。
4. 磨消繩文は、資料が微細なためモチーフについては不明確であるが、長方形文と須藤氏のいう（須藤：1976）C型変形工字文が各1点含まれる。

5. 地文としては、縄文と無文（ミガキ）があるが、縄文が圧倒的に多い。縄文はいずれもL→Rによる左傾斜縄文である。
6. 変形工字文の交点には、ほとんど粘土粒が消失している。
7. 変形工字文、波状文を有する高环、鉢にはほとんど縄文を欠き、一方、壺の1、3類には縄文が全面に充填されるだけで、器種による地文の使い分けが明瞭である。
8. 底面には、木葉压痕をとどめるものが多く、無文その他が若干ある。

以上のような特徴を有する土器群を東北地方の土器型式に求めると、弥生中期のいわゆる棚倉式に最も近い（伊東：1955）。棚倉式は、宮城県では通常、大泉式と呼ばれ（伊東：1957）一部で寺下圓式（加藤：1968）、山王Ⅲ層式（伊東：1973）と呼ばれる。また大泉式の前に、福浦島下層式を設定し（伊藤：1969）、弥生式の最も古いグループとする場合がある。

伊東信雄氏による棚倉式土器の特徴は「磨消縄文が発達し、その縄文の部分は太い沈線（曲線的）によってかこまれている仲間である。」とされている（伊東：1955）。

一方、伊藤玄三氏による福浦島下層式の概念は「大洞A式から継承した文様構成を更に流麗にし、太い沈線によって文様を描いているもの」「大洞A式に比して沈線表現が顕著であり、また磨消縄文はほとんどとられていない」「飯野坂遺跡では、壺の形が弥生的な形態をとっている」などである（伊藤：1969）。

大泉式については、最近、命名者の伊東信雄氏が自ら形式としての不備を指摘され、幡沼遺跡、及び山王Ⅲ層出土土器を充てられ、大泉式（山王Ⅲ層式）という表現をとられた（伊東：1973）。

山王Ⅲ層出土遺物を須藤氏（須藤：1973）及び興野氏（興野：1976）論文によって理解すると、文様表現技法には沈線手法と磨消縄文手法があり、その比は2:1、または1:1に近くなる。沈線による工字文は流線化し、波状文は多条化の傾向を示し、波調も流麗となる。壺等は、萩田遺跡とほとんど変わらない。

福浦島下層式と大泉式（山王Ⅲ層式）を比較すると、明らかに前者から後者への発展過程を把握することができる。ただし、福浦島下層式は良好な示準資料に恵まれていない。筆者は福浦島下層式の一括資料として、白石市薬師堂遺跡（片倉、後藤、中橋：1976）、一迫町青木畑遺跡（興野：1976）を充てたいと考えている。萩田遺跡出土土器も福浦島下層式に包括されるものと理解している。ただし、磨消縄文土器の一部は、より後出の可能性が強い。

註1.（興野：1976）の中で、興野氏は楔形圓式もあると述べている。

〈引用・参考文献〉

- 興野義一（1976）：「第二編 考古学からみた高清水」『高清水町史』
- 伊東信雄（1957）：『古代史』『宮城県史』1
- 佐藤信行（1972）：「栗原郡における考古学的遺跡(二) —栗原郡に於ける弥生式文化—」栗原郷土研究 特集号
- 須藤 隆（1973）：「土器組成論」考古学研究 第19卷第4号
- ・（1976）：「龜ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」考古学研究 第23卷第2号
- 伊東信雄（1955）：「東北」 日本考古学講座4
- ・（1973）：「弥生文化」『水沢市史』1
- 加藤 孝（1968）：「宮戸島貝塚寺下地区出土品に見られる弥生式文化」仙台湾周辺の考古学的研究
- 興野義一（1976）：「弥生文化」 一迫町史
- 片倉信光
- 後藤勝彦（1976）：「考古資料」『白石市史』別巻
- 中橋彰吾
- 伊藤玄三（1969）：「東北」 新版考古学講座 第4巻

太田報文関係〈引用・参考文献〉

- 名取市教育委員会（1977）：「十三塚遺跡」名取市文化財調査報告書第2集
- ・（1978）：「...」 第3集
- 須藤 隆（1973）：「土器組成論」考古学研究 第19卷第4号
- 仙台市教育委員会（1978）：「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第13集
- 伊藤玄三（1966）：「東北」日本の考古学Ⅱ 弥生時代
- ・（1969）：「東北」新版考古学講座 第4巻
- 佐藤庄一（1978）：「東北南北における弥生式土器研究の現状」考古風古記 第3号
- 興野義一（1976）：「原始期」『一迫町史』 一迫町
- 志間泰治（1971）：「鰐沼遺跡」
- 宮城県教育委員会（1977）：「清太原西遺跡・船渡前遺跡」宮城県文化財調査報告書第49集

宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器

太田 昭夫

名取市手倉田に所在する十三塚遺跡は、弥生土器の一型式である「十三塚式」が設定された遺跡として知られている。最近では、遺跡内の運動公園計画に伴う造構確認調査が行われ、これまで縄文時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡が100軒近く確認されている。その中には弥生時代の住居跡も数軒含まれている（名教委：1977、1978）。

遺跡は、標高20～30mの小丘陵上に立地している。その範囲は数万m²にも及び、いくつかの尾根を包み込んでいる。遺跡の周辺には、同丘陵の先端部に立地する手倉田遺跡、南向いの丘陵上に立地する飯野坂東遺跡、同西遺跡など、弥生時代の遺跡が数多く分布している（註1）。

ここに紹介する弥生土器は、遺跡の最も南寄りの尾根の北斜面において、長芋掘りの際に出土したものである（註2）。その出土範囲は約50m²とせまく、ある程度まとまりをもつ土器群と言える。出土土器のほとんどはここに紹介する弥生土器で、平箱一つ程度の量である。しかしこれらは小片で器面の磨滅したものが多い。そのため、ここでは本資料の全体的な特徴を大まかに述べ、文様の分類については、図示したものを対象に行う。器形の判別については、こ



これまでの知見から判断した。小片のため、その認定に誤りがないとは言えない。

2

初めに本資料の大まかな特徴を述べる。

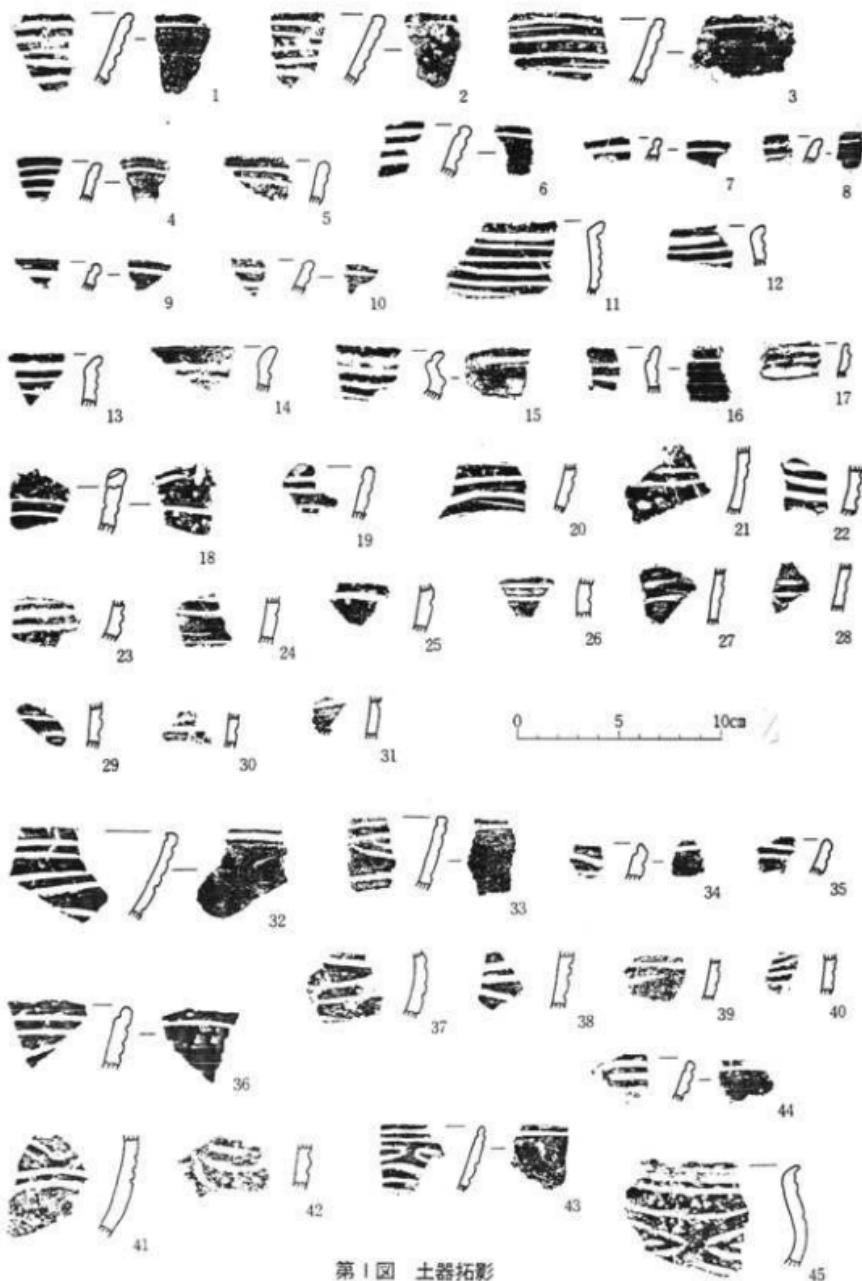
胎土には、大半の土器に石英などの粗砂粒が含まれている。径は1mm前後のものが多い。この粗砂粒は、比較的の壺類に多く含まれているように観察される。色調は、橙色、にぶい橙色、にぶい黄橙色、浅黄橙色、黄灰色、黒褐色などがあり、全般的にみて明るく、にぶい黄橙色、浅黄橙色を呈するものが多い。器壁は、灰白色、明褐灰色を呈するのが多い。成形時に粘土の積み上げをした痕跡の認められるものが数点ある。また壺類に、土器の断面から体部と口縁部を接合した痕跡の認められるものがある（第4図19、26）。器面調整は、内面はほとんど全体にわたってミガキが施されている。その方向は横が多い。外面は、口縁部ではヨコナデとミガキがある。前者は壺類と壺類の一部にみられる。後者は鉢・高坏類、壺類にみられる。体部は文様の施文されない部分はすべてミガキが施されている。特に壺類ではミガキが丁寧であり、中には光沢をもつものもある。外面ではまた、ヨコナデ、ミガキ調整以前にハケメ調整が行われた痕跡の認められるものが壺類にある。底部は全体にミガキが施されているものも見られるが、調整がなく成形時の木葉痕をとどめているのが多い（第4図26、27）。鉢・高坏類に、焼成後に朱塗を施した痕跡のあるものが数点みられる。

文様の施文には、繩文、沈線文、列点刺突文がある。繩文は、鉢・高坏類の体部と壺類の体部と口唇部に主として施される。すべて単節斜繩文で、その原体はしRがほとんどだが中にはRLもみられる。節の幅は1mm～4mmと大小さまざまである（第4図31～35）。節の小さいものは鉢・高坏類に多く、大きいものは壺類に多い。沈線文は、鉢・高坏類の外面全体と口縁部内面に、壺類、壺類の頸部に施される。その溝幅は2mm～4mmで、3mm前後のものが多い。溝の深さは1mm～2mmのものが多く、その断面はほとんどU字形をなす。列点刺突文は壺類の頸部に施される。長楕円形を呈するものが多く、その長さは1cm前後である。棒状の刺突具で横方向か、斜め上方から連続して刺突されている。

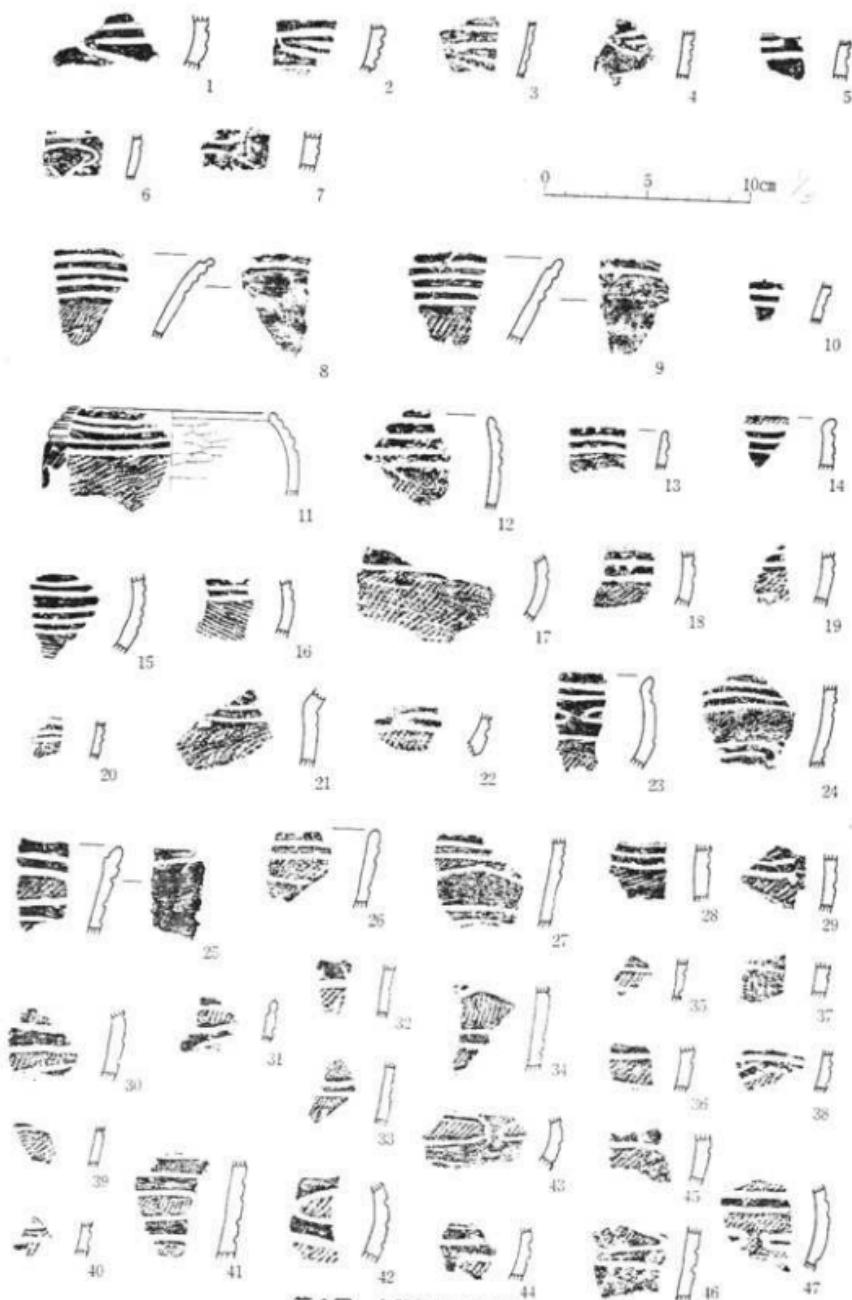
以上の文様の施文が基本になって土器の文様が構成されている。次に器形別にこれらの文様の分類を行いたい。

（鉢・高坏類）平行沈線文を主体とするもの（I類）と磨消繩文を構成するもの（II類）に大別される。いずれも文様の施文のない部分は内外面ともミガキ調整が認められる。

I類：平行沈線文を主体とするもので、さらに地文が無文（ミガキ）だけからなるもの（A類）と地文が無文と繩文からなるもの（B類）に分かれる。



第1図 土器拓影



第2図 土器拓影、実測図



第3図 土器拓影、実測図

区画内にミガキを施し縄文を磨り消している。47はこれらと異り、沈線による区画外に縄文の認められるもので、沈線で区画した後、縄文を施すいわゆる「充填手法」を用いている。44の縄文施文の部分と沈線内に朱塗の痕跡が認められる。

この他に高坏の脚部から坏部にかけての破片がある。上の分類には含まれず、外面にL Rの車筋斜縄文が施されている（第4図20）。第4図29、30は体部から底部にかけての破片である。ともに底部がやや外方に張り出す特徴をもっている。蓋の可能性もある。

（壺類）器形の多くは、体部から内擣しながら立ち上がり、頸部で「く」の字状に屈曲するものである。いずれも口縁部外面にヨコナデ、内面全体にミガキの調整が認められる。また外面にハケメ調整の痕跡をとどめるのもみられる。頸部の文様構成から以下のように分類できる。

I類（第3図1～5）頸部に何ら文様施文のみられないものである。縄文は体部と口唇部に施文されているが中には3のように口唇部に縄文のないものもある。4はR Lの縄文原体を使用している。5は器形が内擣ぎみに立ち上がるものである。

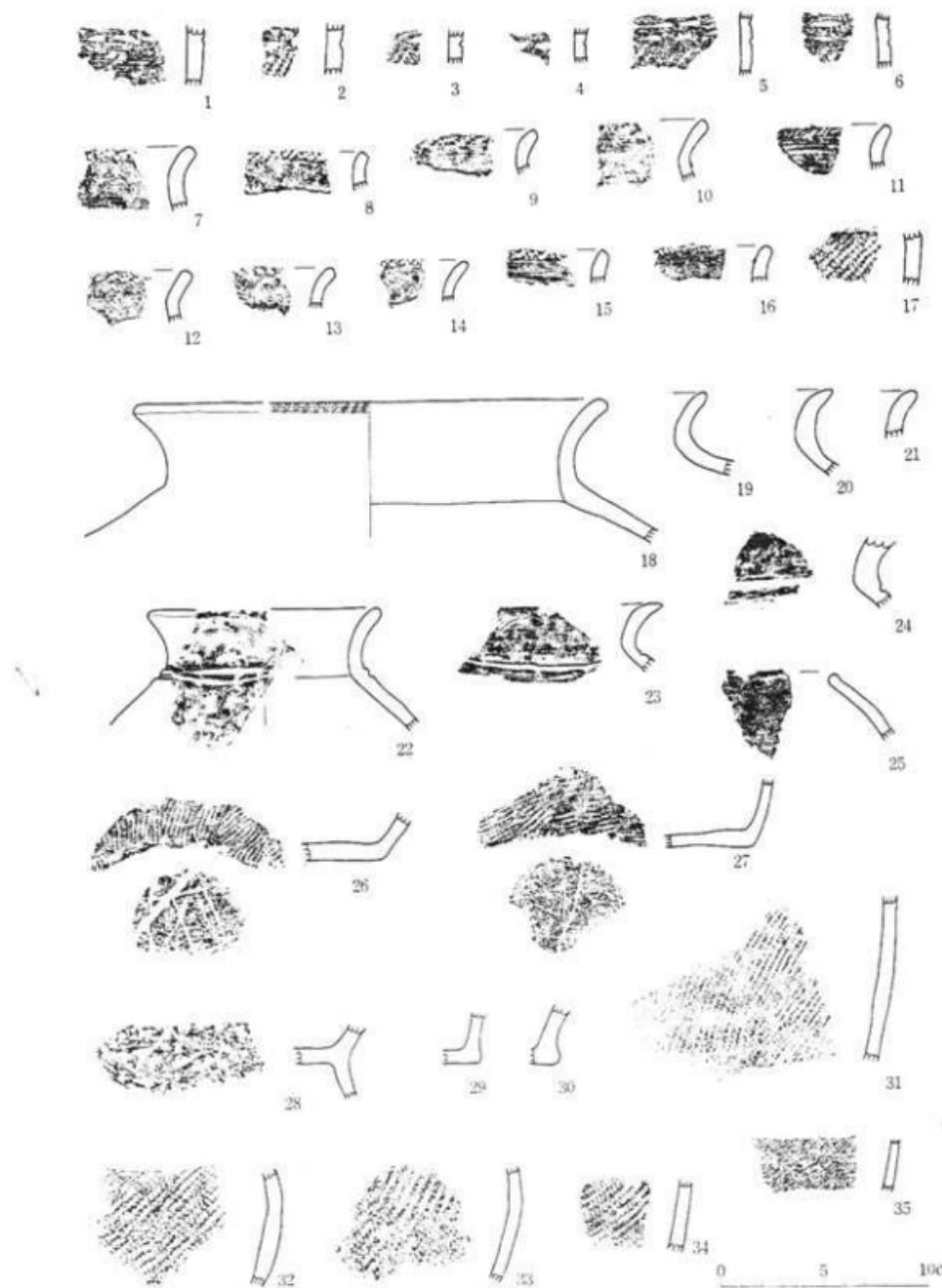
II類（第3図6～16）頸部に口縁と平行に沈線が施文されているものである。これには沈線が一条だけのもの（6～10）、二条のもの（12～15）、四条のもの（16）があり、バラエティに富んでいる。いずれも縄文が体部と口唇部に施文されている。12を例に施文の手順を観察すると、器面調整（ハケメの後、口縁部ヨコナデ）後、体部と口唇部に縄文を施文する。その後、口縁と平行に沈線が二条施文される。再度その周辺の器面を調整する。以上のように認められる。

III類（第3図18、19）頸部に口縁と平行に沈線と列点刺突文を施すものである。18は二条の沈線間に列点刺突文を施している。19は一条の沈線上に列点刺突文を施している。体部と口唇部には縄文が施されている。

IV類（第3図20～25、第4図1～6）頸部に口縁と平行に列点刺突文が施されているものである。刺突は1列のものと2列のもの（第3図26、第4図5、6）がある。体部と口唇部には縄文が施されているが中には口唇部に縄文のないものもある。

第4図7～17は体部から口縁部にかけての破片である。口唇部に縄文の施されるものが多い。

（壺類）（第4図18～25）器形は体部からゆるやかに内擣し、頸部で「く」の字状に屈曲し、垂直ぎみに立ち上るが多い。大形と小形がある。内面はミガキで、外面も文様の施文がほとんどなくミガキで丁寧に調整されている。18は大型の壺で口唇部に縄文が施されている。22



第4図 土器拓影、実測図

は比較的小形の壺で頸部に口縁と平行な2条の沈線がみられる。18、19には口縁と平行な沈線がみられる。25は比較的小形のもので器形が内傾するものである。

3.

本資料は、せまい範囲内から出土したことから、ある程度まとまりをもつものと言えるこれらに共伴関係が認められたわけではない。それらをふまえた上で若干の考察を加えてい。

これまでの上部の観察、分類から本資料の特徴をまとめてみると土器群は大まかに、鉢、高环類、壺類、壺類に分けられる。

鉢、高环類の器形には、外傾するもの、内傾しながら途中で屈曲するものなどがある。口縁形には平縁のものが多く中には小突起をもつもの、小波状を呈するものもある。文様施文には沈線文と繩文がある。沈線文は比較的多くは口縁部内面にまで施文されている。繩文はLRの単節斜繩文が多い。文様によって大きくI類（平行沈線文を主体とするもの）とII類（磨消繩文を構成するもの）に分けられた。量的にはI類が多く、II類はI類の3分の1程度である。I類はさらにA類（沈線文のみのもの）とB類（沈線文と繩文からなるもの）に分けられた。A類はa（平行沈線文のもの）b（平行沈線文と斜行沈線のもの）c（変形工字文に類似するもの）に、B類はa（平行沈線文のもの）b（変形工字文に類似するもの）にそれぞれ細分された。沈線文のみからみると、A類-aとB類-a、A類-cとB類-bが同特徴をもっている。II類はさらにA類（平行、斜行沈線間の一部に繩文の認められるもの）とB類（変形工字文に類似した沈線の内外に繩文の認められるもの）に分けられた。1例を除いてはいずれも、繩文施文後、沈線で区画しミガキを施している。

壺類の器形は体部から内傾しながら立ち上がり頸部で「く」の字状に屈曲するのが特徴である。文様の施文には沈線文、列点刺突文、繩文がある。沈線文、列点刺突文は頸部に、繩文は体部と口唇部に施文される。繩文はLRの単節斜繩文が多い。頸部の文様からI類（文様のないもの）II類（平行沈線文のもの）III類（平行沈線文と列点刺突文のもの）IV類（列点刺突文のもの）に分けられた。

壺類の器形は体部から内傾し、頸部で「く」の字状に屈曲し、垂直ぎみに立ち上がるが特徴である。いずれも比較的短頸である。大形と小形のものがあり大形には口唇部に繩文施文のものがある。いずれもその他の部分は丁寧にミガキによる調整がなされている。

以上からまず器種では、繩文晩期に一般的だった深鉢が全くみられないことが大きな特徴としてあげられる（須藤：1973）。鉢、高环類では、小突起、小波状がみられること、文様に変形工字文に類似したものがみられることなどは大洞A'式の特徴を残している。しかし文様で平

行沈線文が主体を占めること、磨消繩文がみられることなどは大洞A'式に新しい要素として認められる。壺類は大洞A'式の壺に比して頸部の屈曲が強く、頸部に平行沈線文や列点刺突文を施すなど新しい要素が多く認められる。むしろ鉢形圓式に特徴的な壺に近似する（仙教委：1978）。また壺類にはほとんど文様施文がないことも大洞A'式との相違点である。

伊藤玄三氏は、東北地方の弥生土器の編年において、鉢形圓式土器以前の土器を沈線で大洞A'式の変形工字文の崩れたのを描く特徴の福浦島下層式と磨消繩文を特徴とする棚倉式の2型式に細分している（伊藤：1966、1969）。その際、福浦島下層式の資料として本遺跡に接する飯野坂遺跡出土の鉢と壺を示している。鉢は内身しながら立ち上がり途中で屈曲する器形で口縁部に平行沈線と波状沈線を施している。壺は頸部に列点刺突文、口唇部と体部に繩文を施している。これらはともに本資料のものと著しく類似している。しかもこれらに石庖丁が伴うなどからこの福浦島下層式の時期が弥生文化の受容の最初の段階だとらえている。したがって本資料の大部分は、この編年によれば福浦島下層式に含められるものと考えられる。

本資料の類例としては、船渡前遺跡（宮教委：1977）出土のものがある。本遺跡と距離的に近いこと也有ってか、文様構成や器形など共通点が多い。鰐沼遺跡（志間：1971）出土のものは、文様や器形がバラエティに富んでいる。これらについては少なくとも2型式に細分できるという（佐藤：1978）。そうだとすれば本資料はこれらの内、文様に変形工字文を主体とする古手のものに近いと考えられる。山王遺跡Ⅲ層出土のもの（須藤：1973）、青木畑遺跡跡出土のもの（興野：1976）は、沈線文を主体とするもので、磨消繩文もみられる点では本資料もこれらと類似する。しかし兩遺跡では深鉢の器種がみられること、本資料に特徴的な壺がみられないことなど本資料と異なる点もみられる。

以上、本資料の紹介とその編年の位置について述べてきたが、本資料自体小片が多く、土器全体の内容に不明な点が多いこと、筆者の勉強不足などから記述に誤りがあるかもしれない。それらについては、今後とも類例資料を集め検討していきたい。

なお本稿作成中に、名取市教委による十三塚遺跡の調査で、本資料出土地点の付近から多量の弥生土器が発見されたのを知り、実見した。これらには本資料と同特徴をもつものも多くある。近日、その概報が発刊されるとのことである。

註1　名取市内の弥生時代の遺跡は、現在23ヶ所確認されている（宮城県遺跡地名表）。これらの大部分は本遺跡と同様、小丘陵上に立地している。

註2　「十三塚式」の土器は、本資料の出土地点と同尾根の南斜面（瀬戸）と谷をはさんで西側の斜面、尾根上から多く出土している。

＊（引用・参考文献）については、9ページに記した。

宮城県柴田郡村田町中の内遺跡について

佐々木安彦

1

今回ここに紹介する中の内遺跡は、村田盆地のほぼ中央部の東側に位置している。村田盆地は、弥生土器の型式編年で「円田式」と称されている壺の出土地と丘陵をへだてて隣接しており、村田盆地をかこむ丘陵一帯にこの土器に類似する土器片の分布が認められる。今後、当地域における弥生土器の資料として参考になると思われる所以、以下簡単に紹介してみたい。

2

中の内遺跡は、村田町の中心より東に約0.4km、柴田郡村田町村田字中の内に所在している。本遺跡の所在する村田町の地形を概観してみたい。村田町の西側には奥羽山脈が連なっており、それより東にのびる奥羽山麓帶がある。その中の陵前丘陵は高館丘陵とよばれている。この丘陵はさらに南に枝分かれしてのび、村田町の東、西、北をかこみ、山間盆地である村田盆地を形成している。盆地内の北部には、川崎町より源を発する荒川の浸蝕作用による段丘の形成がみられ、南部では周囲の開拓された丘陵地内部にまで沖積地が形成され、水田となっていいる。また崩状地ではなく、南に隣接する大河原町付近で自然堤防が形成される。

次に中の内遺跡の微地形をみると、村田町の東側に南下する枝状の高館丘陵がある。この丘陵のほぼ中央部西側斜面、荒川の東岸に立地する。現在畠地である。(村田町の弥生時代遺跡分布図参照)

3

採集した遺物のうちでここでは弥生土器の紹介をする。

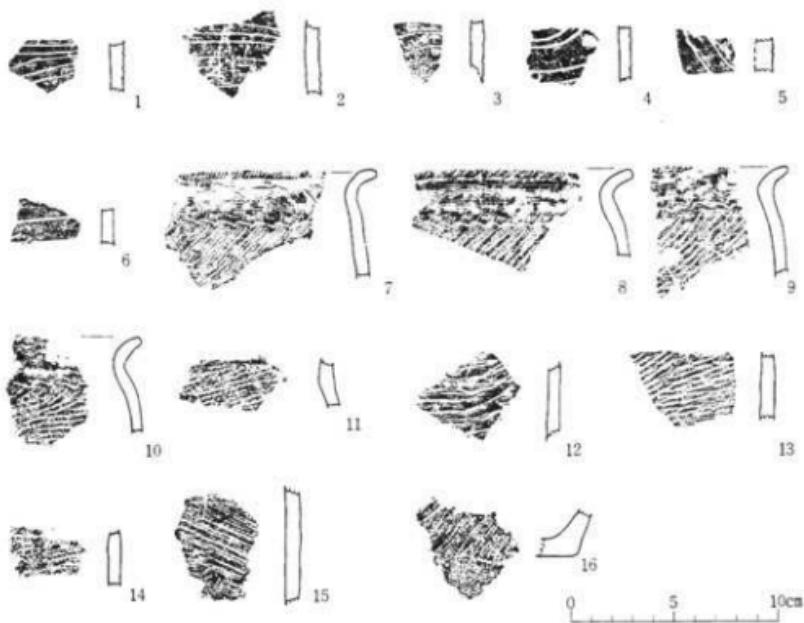
器形には、鉢(高杯?)、壺形土器と甌形土器がある。

(1) 鉢(高杯?)、壺形土器(1~6)

外面に沈線により文様を構成するものである。沈線文による文様は一本工具で描かれている。6にはわずかに縄文の施文もみとめられる。調整はミガキである。内面の調整はナデ、ミガキである。

(2) 甌形土器(7~16)

7~10は口縁部から体部にかけての破片で、外面の口唇部と体部に単節縄文(LR)、付加縄文(LR+R)が施文されている。また頸部と体部の境には綾络文が施文されている。口縁部内外の調整はナデである。11~15は体部破片で、外面に単節縄文(LR)、付加縄文(LR



+R) が施されている。内面の調整はミガキである。16は体部から底部にかけての破片で体部外面に付加縫文 (L R +R) が施され、底部外面に布压痕がみとめられる。

これらの資料について従来の研究成果と比較すると、蔽王町大橋遺跡（藤沼：1971）、同町欠遺跡（白鳥：1971）、名取市西野田遺跡（宮教委：1974）、村田町北沢遺跡（斎藤、真山：1978）出土のものに類似している。これらの編年的位置づけはいずれも「円田式」とされている。よって本資料もすべて「円田式」の範疇に含められると考えたい。

〈引用・参考文献〉

藤沼邦彦（1971）：「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集

白鳥良一（1971）：「欠遺跡」

宮城県教委（1974）：「西野田遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集

斎藤吉弘（1978）：「北沢遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第56集
真山悟

宮城県に於ける弥生時代の住居跡・石器・埋葬址集成

小川 淳一

1

宮城県の弥生時代研究は、山内清男の「石器時代にも稻あり」(山内:1925)に端を発して以来、既に、半世紀以上の歴史的変遷を経てきた。戦後、伊東信雄等を中心とした調査・研究の結果、今日、東北地方南部の弥生時代は、稻作農耕を基盤にして順調に発展してきたと把握されている(伊東:1950・1957・1970、伊藤:1966)。そして、近年の相次ぐ、古墳時代前期の方形周溝墓の発見(現在、5遺跡)は、当地に於ける弥生時代の社会の内的発展の所産であることを実証化しているとする理解が提示されている現状である。

筆者は、ここで、宮城県に於ける弥生時代の基本的な社会構造把握のための基礎的作業として、既存の文献を中心にして、社会構造把握のために関係する遺跡の地名表を作成することにしたい。ここで言う、関係遺跡とは、社会構造把握のための基本的分析視点としての、①集落論的視点 ②生産用具論的視点 ③埋葬形態論的視点に関連する遺跡である。

2

① 集落跡(表1、付図)

宮城県の弥生時代の遺跡数は、現在、約300ヶ所確認されている(宮城県教委:1976)が、集落跡として全面調査の実施されたものは存在しない。ここでは、住居跡の検出されたものについて集成した。十三塚式期と天王山式期の竪穴住居跡である。

表1

遺跡名	所在地	立地	時期	形態	文献
十三塚遺跡	名取市手倉沢	丘陵	十三塚式期	竪穴住居 プラン—3.9m×4.4mの橢円形 炉—住居中央部 主柱穴—5本 壁柱穴—8本	42
上ノ原A遺跡	一迫町川口字上ノ原	丘陵	天王山式期	竪穴住居 プラン—4m×4.2mの馬蹄形 炉—焼面三ヶ所 柱穴—Pit 5箇 板壁材(炭化材)	47

② 生産用具(表2、付図)

弥生時代の生産用具(労働手段としての労働用具のうちの「生産の筋骨系統」を言う)として、磨製石器類、木製農耕具類、鉄器類を主要なものとして考えているが、宮城県では、木製品の検出例は皆無であり、鉄器としては、鳴瀬町寺下团貝塚出土の鉄製鋸頭が1例(加藤:19

68) のみであるため、ここでは、弥生系磨製石器類（石庵丁、蛤刃石斧、片刃石斧等）を中心として集成した。また、当地に於いて、弥生時代に特有とされているアメリカ式石鏃も加えた。各形態別の遺跡数は、石庵丁（49遺跡）、蛤刃石斧（10遺跡）、片刃石斧（10遺跡）、石ノミ形石斧（2遺跡）、石鍬（4遺跡）、有角石斧（6遺跡）、磨製石剣（1遺跡）、アメリカ式石鏃（24遺跡）である。次に、所属時期の判明するものを見ると、石庵丁は大泉式期（2遺跡）、樹形圓式期（1遺跡）、蛤刃石斧は大泉式期（1遺跡）、樹形圓式期（2遺跡）、片刃石斧は大泉式期（2遺跡）、樹形圓式期（1遺跡）、石ノミ形石斧は大泉式期（2遺跡）、樹形圓式期（1遺跡）、石鍬は大泉式期（1遺跡）、樹形圓式期（1遺跡）となっている。このことから、宮城県では、弥生系磨製石器類は大泉式期から、ほぼ出現することが知られる。しかし、発掘例の僅少さから、南小泉遺跡（伊東：1950）に代表される樹形圓式期の石器の量的増加は、現時点では、追証できない。

③ 埋葬形態（表3 付図）

埋葬形態は、社会的意識諸形態の表出形態であり、人間集団の社会関係を表出するものである。東北地方の弥生時代の埋葬形態は、基本的に、再葬墓（小豎穴墓）・土器棺墓・土壙墓に分類されている（伊藤：1961、柴田：1972）。

宮城県の各形態は、再葬墓（1遺跡—棚倉式期）、土器棺墓（4遺跡—樹形圓式期（2）、十三塚式期（1）、天王山式期（1））、土壙墓（1遺跡—大泉式期）となっている。以上のことから、宮城県では、樹形圓式期以降に、土器棺墓が増加することが指摘される。

3

宮城県の弥生時代の社会把握のために、関連遺跡の地名表を作成した訳であるが、具体的な発掘調査の例が少ないことから、詳細な実態は不明な点が多いようである。今後、実測図等の図版を付けて、新たに集成を行ないたい。末尾になるが、宮城県文化財保護課丹羽茂氏、阿部博志氏に御教示頂いたことを感謝いたします。

（1979. 3）

〔参考文献〕

- 山内清男（1925）「石器時代にも船あり」『人類学雑誌』第40巻第5号
- 伊東信雄（1950）「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3
- 伊東信雄（1957）「古代史」『宮城県史』1
- 伊東信雄（1970）「船作の北進」『古代の日本』8
- 伊東玄三（1966）「東北」『日本の考古学』III
- 宮城県教委（1976）「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
- 加藤 孝（1968）「宮戸島貝塚下園地区出土品に見られる弥生式文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』
- 伊藤玄三（1961）「東北日本における弥生時代の墓制」『文化』第25巻第3号
- 柴田俊彦（1972）「弥生時代後期における共同体変質過程に関する一試論」『福島考古研究紀要』第2冊

表2 宮城県の弥生時代石器出土遺跡集成

番号	遺跡名	所在地	立地	出土土器	出土石器	所属時期	文献
1	矢越遺跡	白石市小原矢越	段丘		アメリカ式石鏟	32	
2	大柳前遺跡	* 大平大柳前	沖積地		アメリカ式石鏟		筆者著
3	田中遺跡	* 大鷹沢田中	*		石庵丁	6・32	
4	梅田遺跡	* 梅田	*		石庵丁	6・32	
5	前山遺跡	* 大平前山	丘陵麓		アメリカ式石鏟	32	
6	弥陀内遺跡	* 弥陀内	沖積地		石庵丁	6・32	
7	荒井遺跡	* 福岡深谷荒井	台地	大泉式	石庵丁 アメリカ式石鏟	6・32	
8	松田遺跡	* * * 松田	*		アメリカ式石鏟	17・32	
9	郡山橋出土	* 郡山	河川		石庵丁	32	
10	河原園遺跡	丸森町金山河原田	丘陵麓		磨製石劍	6	
11	伊手遺跡	* 下櫛ヶ作	谷底平野		石庵丁	4	
12	雁歌遺跡	* 雁歌	沖積地		石庵丁	6	
13	寺内作田遺跡	* 寺内作田	丘陵斜面		石庵丁(4)	6	
14	羽山遺跡	* 羽山	*		石庵丁	6	
15	大門前遺跡	* 踏矢間大門前	沖積地		石庵丁 片刃石斧	6	
16	塚合遺跡	* * 塚合	自然堤防	大泉式	石庵丁	8・15	
17	小佐田遺跡	* 小佐田(弓目木)	丘陵中腹		石庵丁	6	
18	越沼遺跡	角田市野田越沼	丘陵斜面	大泉式	磨製石斧 大型船刃石斧 片刃石斧 石ノミ形石斧 石 石庵丁 石匙 石鉗	大泉式期 15	
○	西根金神出土	*			石庵丁	6	
19	一の沢遺跡	山元町坂元上平	台地		石庵丁	5	
20	館下遺跡	* * 館下	*		石庵丁	33	
21	清水遺跡	* 山下小平浅水	丘陵斜面		石庵丁	33	
22	北緯塚遺跡	* * 北	丘陵		石庵丁	5	
23	中原西遺跡	亘理町吉田中原	丘陵斜面	十三塚式	石庵丁	29	
24	宮前遺跡	* * 宮前	丘陵	舞形柄・十三塚天王山式	石庵丁 アメリカ式石鏟	32	
25	越南園遺跡	* 越南	台地		石庵丁	6・29	
26	石間神社遺跡	* 通波下郡石間	丘陵斜面		石庵丁(3)	29	
27	大森山遺跡	* * 大森山	*		石庵丁(4)	6・29	
28	小松堂遺跡	* 堤内八ヶ入	丘陵中腹		石庵丁	29	

番号	遺跡名	所在地	立地	出土土器	出土石器	所属時期	文献
28	大山遺跡	藏王町円田大山	丘陵斜面	円田式	アメリカ式石鏃	円田式期	14
30	藏本遺跡	村田町間場藏本	*	圓筒河・十三塙式	アメリカ式石鏃		40
31	入遺跡	* 小泉入	*	円田式	石庵丁		40
32	山ノ入遺跡	* 山ノ入	丘陵	円田・天王山式	アメリカ式石鏃		40
33	北沢遺跡	* 北沢	丘陵中腹	円田式	石鏃・石匙・石錐	円田式期	44
34	寺後遺跡	柴田町本船道寺後	丘陵端	円田式	太型蛤刃石斧		34
35	上川名貝塚	* 上川田竹ノ内	丘陵		石庵丁		6
36	糞坂戸ノ内遺跡	* 糞坂戸ノ内	丘陵麓		石庵丁		22
37	長岡遺跡	岩沼市長岡三色吉台	丘陵斜面	円田・十三塙式	石庵丁		6・24
38	宿前遺跡	名取市鶴島市目宿前	丘陵麓		片刃石斧		39
39	宮下遺跡	* * 荘宮下	丘陵斜面	円田・天王山式	石庵丁 アメリカ式石鏃		28
40	泉遺跡	* * 泉	丘陵	大泉・天王山式	石庵丁 アメリカ式石鏃		16
41	西野田遺跡	* * 堀手西野田	*	大泉・天王山式	石庵丁 (2) 大型蛤刃石斧 (2) 扁平片刃石斧 (1) 石鍬 (5) 敲石・磨石・凹石 石皿・削片石器		26
42	飯野坂遺跡	* 飯松～小豆島	丘陵	福浦島下層 iform形圓式	石庵丁		11
43	野田山遺跡	* 愛島塙野田山	丘陵斜面		石庵丁		6
44	今熊野遺跡	* 北台・南台・渕ノ裏	丘陵	十三塙・天王山式	石庵丁 アメリカ式石鏃		24
45	清水遺跡	* 田高清水	自然堤防		石庵丁 (2) 蛤刃石斧・アメリカ式石鏃		27・38
46	十三塙遺跡	* 手倉田	丘陵	大泉・十三塙式	石庵丁・片刃石斧 アメリカ式石鏃・石鏡		42
○	植松出土	*			石庵丁		6
○	北台出土	*			石庵丁		6
○	笠島出土	*			石庵丁 (4)		6
47	船渡前遺跡	仙台市山田船渡前	自然堤防	大泉式	石庵丁 (1) 扁平片刃石斧 (2) 石鏡・石匙・石鑿 石皿・敲石・凹石	大泉式期	41
48	大野田遺跡	* 大野田新折	沖積地		石庵丁		6
49	藤田新田遺跡	* 藤田新田	砂堆	iform形圓式	石庵丁 (3)		6
50	南小泉遺跡	* 遠見塙一丁目	沖積地	大泉～天王山式	石庵丁 (2) 蛤刃石斧 扁平片刃石斧 石ノミ形石斧 有角石斧 四頭石斧 石鏡・石匙 アメリカ式石鏃・石鏡凹石	iform形圓式期	3・6 35・43
51	多賀城跡五方崎	多賀城市相用五方崎	丘陵	神明式・十三塙式	石庵丁 (2)		44
52	iform形圓貝塚	* 大代	砂堆	iform形圓式	太型蛤刃石斧	iform形圓式期	1

番号	遺跡名	所在地	立地	出土土器	出土石器	所属時期	文献
53	土浜A貝塚	七ヶ浜町清水土浜	海岸低地	寺下圓式	棒状鉈刀石斧		12
54	二月田貝塚	吉田浜二月田	丘陵麓	楕形圓式	石庵丁・片刃石斧		12
55	福浦島貝塚	松島町松島福浦島	島山奥	楕形圓式	有角石斧		12
56	寺下圓貝塚	鳴瀬町宝戸里浜	丘陵麓	寺下圓式	有角石斧		12
57	俵庭遺跡	河南町北村海上	丘陵斜面		アメリカ式石鏃	丹羽氏 家	
58	沼津貝塚	石巻市沼津外八幡山	丘陵	大泉式	石庵丁	アメリカ式石鏃	20・36
59	要害遺跡	大和町落合松坂	丘陵斜面		石庵丁・有角石斧		31
60	深谷遺跡	大郷町大松沢	*		石庵丁		6
61	一の間遺跡	色麻町一の間遠南	丘陵	大泉・天王山式	アメリカ式石鏃		48
○	西小野田出土	小野田町			有角石斧		6
62	小池裏遺跡	宮崎町米泉小池裏	台地	十三塚・天王山式	有角石斧		21
63	上の原遺跡	孫沢上の原	丘陵斜面	大泉・天王山式	棒状鉈刀石斧		21
64	東山遺跡	島崎東山岡	丘陵麓	大泉式	アメリカ式石鏃		21
65	天王山遺跡	*		天王山式	アメリカ式石鏃		21
66	若ノ谷池遺跡	古川市長岡若谷地	丘陵		石庵丁		6・13
67	下般尻遺跡	小野下般尻	丘陵斜面	天王山式系	扁平片刃石斧・石鏃 ノメリカ式石鏃		13
68	萩田遺跡	高清水町上萩田	台地	大泉式	扁平片刃石斧		18
69	嘉倉貝塚	築館町玉沢嘉倉	*	大泉・楕形圓式	太型鉈刀石斧		(19)
⑩	上ノ原A遺跡	一迫町川口礼母沢	丘陵	天王山式系	スラバレー・磨製石斧 石鏃・石皿・他	天王山式期	47
○	上ノ原B遺跡	*	*	*	アメリカ式石鏃 アメリカ式石鏃		47
○	山の神出土	*	*	*	アメリカ式石鏃		47
○	大穴山出土	*	*	*	アメリカ式石鏃		47
⑪	山王圓遺跡	真坂山玉道満	扇状地	山王圓式	石庵丁(?)		(37)
72	浦野出土	浦野上大土			太型鉈刀石斧		37

表3 宮城県の弥生時代埋葬址集成

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	埋葬形態	文献
I	青木遺跡	白石市深谷青木	台地	椭形圓式期	再移墓	9・10
II	船渡前遺跡	仙台市山田船渡前	自然堤防	大泉式期	土壙墓(?)	41
III	西台塚遺跡	仙台市郡山二丁目	自然堤防	椭形圓式期	土壙墓・壺棺墓	7・10
IV	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目	冲積地	椭形圓式期	壺棺墓	3・6 10
V	清水洞墓	七ヶ浜町代ヶ崎清水	丘陵端	十三塚式期	壺棺墓(胎兒骨)	10
VI	宇南遺跡	志波崎町八幡宇南	台地	天王山式期	壺棺墓	46

※ ○で囲んだものは発掘調査の実施されたものである。

〈遺跡集成主要文献〉

1. 杉原 荘介 (1936) 「陸前柳形圓貝塚出土の石器」『多賀城町誌』所収
2. 伊東 信雄 (1950) 「東北地方の弥生文化」『文化』第2巻4号
3. 伊東 信雄 (1950) 「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3
4. 伊具郡社会科研究会 (1952) 『伊具郡郷土誌』
5. 志間 泰治 (1956) 「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
6. 伊東 信雄 (1957) 「古代史」『宮城県史』1
7. 伊藤 実三 (1958) 「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻1号
8. 伊東 信雄 (1960) 「東北北部の弥生式土器」『文化』第24巻1号
9. 伊藤 実三 (1960) 「宮城県青木の弥生遺跡と出土土器」『東北考古学』1
10. 伊藤 実三 (1961) 「東北日本における弥生時代の墓制」『文化』第25巻3号
11. 伊藤 実三 (1966) 「東北」『日本の考古学』Ⅲ
12. 加藤 孝 (1968) 「宮戸島貝塚下西地区出土品に見られる弥生式文化」『仙台溝原辺の考古学的研究』
13. 古川市 (1968) 『古川市史』上巻
14. 宮城県教委 (1968) 「埋藏文化財緊急調査概報 (東北版貢自動車道遺跡)」『宮城県文化財調査報告書』第17集
15. 志間 泰治 (1971) 『鹽沼遺跡』
16. 太田 昭夫 (1971) 「假称泉遺跡とその表探出物について」『宮教考古』第3号
17. 宮城県教委 (1972) 「東北自動車道関係遺跡発掘調査報告 (白石市・栗田町・田町地区)」『宮城県文化財調査報告書』第25集
18. 佐藤 信行 (1972) 「栗原郡における考古学的遺跡 (二) —栗原郡における弥生文化—」『栗原郷土研究』特集号
19. 第一町 (1972) 『栗館町史』
20. 橋本 政助 (1973) 「仙台湾における先史狩漁文化」『矢木町史』第1卷
21. 宮崎町 (1973) 『宮崎町史』
22. 宮城県教委 (1973) 「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第30集
23. 宮城県教委 (1973) 「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第33集
24. 太田 昭夫 (1974) 「仙台平野の弥生土器 (1) —岩沼市長岡遺跡 (その1) —」『宮教考古』第6号
25. 小野 田町 (1974) 『小野田町史』
26. 宮城県教委 (1974) 「東北新幹線関係遺跡調査報告」『宮城県文化財調査報告書』第35集
27. 宮教考古研 (1975) 「名取川水系分布調査予報」『宮教考古』第7号
28. 名取市教委 (1975) 「宮下遺跡—名取市宮下における古代集落の発掘調査概報—」『名取市文化財調査報告書』第1集
29. 亘理町 (1975) 『亘理町史』上巻
30. 大和町 (1975) 『大和町史』
31. 宮城県教委 (1975) 「宮前遺跡—亘理町における古代集落の発掘調査概要」『宮城県文化財調査報告書』第38集
32. 白石市 (1976) 『白石市史』別巻 (考古資料編)
33. 山元町教委 (1976) 『山元町の文化財』
34. 萩田町教委 (1976) 「船迫ニュータウン内遺跡調査報告」『萩田町文化財報告書』第8集
35. 仙台市教委 (1976) 「昭和50年度史跡遠見塚古墳環境整備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第11集
36. 石巻市教委 (1976) 「沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書」
37. 一迫町 (1976) 『一迫町史』
38. 宮城県教委 (1976) 「宮城県文化財発掘調査略報 (昭和50年度)」『宮城県文化財調査報告書』第42集
39. 宮城県教委 (1976) 「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
40. 村田町 (1977) 『村田町史』
41. 宮城県教委 (1977) 「須太原西遺跡・船渡前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第49集
42. 名取市教委 (1978) 「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第4集
43. 仙台市教委 (1978) 「南小泉遺跡—範例認証調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第14集
44. 宮城県多賀城跡調査研究所 (1978) 「多賀城跡昭和52年度発掘調査概報」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』第14集
45. 宮城県教委 (1978) 「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第36集
46. 宮城県教委 (1978) 「志波坂町八幡字南通路現地説明会資料」
47. 佐藤信行 (1978) 「上ノ原A遺跡—弥生時代の住居跡—」『宮城第一迫町文化財調査報告書』第3集
48. 色麻町 (1979) 『色麻町史』



付図 本文関係遺跡分布図

弥生時代遺跡地名表 [村田町編]

番号	遺跡名	所在地	立地	標高 (m)	出土遺物	時間	出土遺物 の所在地	備考
1	岡 A 遺跡	沼辺、岡、森久保	丘陵頂	90	土器	円田式	縣教委	①③
2	岡 B 遺跡	* * 東沼	*	90	*	*	*	①③
3	鹿野山遺跡	+ 鹿野山	丘陵	70	* 磨製石斧	柳沢河式		①③
4	六斗内遺跡	* 中山、六斗内	分離丘陵	40	*			①
5	上野山遺跡	* 長瀬山、上野山	丘陵頂	200	*		芳賀母幸	①
6	沼田鶴見遺跡	沼田、鶴見、弁天、横山	丘陵	40	*		町博物館	①
7	鴻の巣遺跡	* 鴻の巣	丘陵斜面	100	*		千葉周古衛門	①
8	她沢遺跡	* 她沢	*	40	*			①
9	見世前遺跡	* 見世、見世前	丘陵麓	40	*			①
10	深沢遺跡	* 北沢、深沢	丘陵斜面	90	*			①
11	竹の内遺跡	* 竹の内	丘陵突端	30	*		太田昭夫	③
12	盛田遺跡	* 盛田	丘陵斜面	20	*		*	③
13	元塙遺跡	* 元塙	丘陵突端	25	*	円田式	*	③
14	藏本遺跡	開場、藏本	丘陵斜面	30	土器 石くわ アーチカ式石器	圓田式 3 400-450年	村田一中	①②③
15	高木遺跡	* 高木	*	30	土器			①
16	藏本南遺跡	* 宮の下	*	25	*	円田式	太田昭夫	③
17	武久市遺跡	薄木、武久市	*	100	*	*	佐々木安彦	①
18	宮ノ下遺跡	* 坂下、宮ノ下	*	30	*	*	太田昭夫	③
19	四郎畠遺跡	* 四郎畠	*	25	*	円田式 天王山式	*	③
20	今立遺跡	* 今立	*	30	*	円田式	*	③
21	北成生遺跡	成生、北成生	*	25	*	*	*	③
22	南小谷遺跡	* 南小谷	*	75	*	*	*	③
23	入遺跡	小泉、入	*	60	* 石壠	*	佐々木安彦	①
24	寺の上遺跡	* 寺の上	*	45	*	*	*	①③
25	山の入遺跡	* 山の入	丘陵	80	土器 アーチカ式石器 天王山式	円田式 天王山式	*	①
26	丹野山遺跡	* 山の上、寺の上、今泉	丘陵斜面	60	土器	円田式	*	①③
27	月本遺跡	村田、月本	*	50	* 石くわ	*	村田一中	①②③
28	中の内遺跡	* 中の内	*	40	*	*	佐々木安彦	①③
29	相山遺跡	* 桐山(相山公園)	丘陵麓	70	*	*	町博物館 東北大	①
30	北剣山遺跡	* 北剣山	丘陵頂	130	*			②
31	北沢遺跡	* 北沢	丘陵中腹	50	*	円田式	縣教委 佐々木安彦	①
32	上ヶ沢遺跡	* 上ヶ沢	*	70	*		佐々木安彦	①
33	塙内遺跡	* 塙内	丘陵麓	40	*	天王山式	*	①
34	東足立・東道・清水	東足立、東道、清水	丘陵斜面	95	*	円田式	縣教委	①③
35	鉢山A遺跡	* 鉢山	*	130	*		町博物館	②
36	鉢山B遺跡	*	*	140	*	*		②
37	川村開拓遺跡	足立、北河(川村開拓)	丘陵麓	180	*	円田式	町博物館 県教委	①
38	北向遺跡	*	*	160	*			②

この地名表は、宮城県遺跡地名表を基本にし、その後の文献と踏合で補削したもので、佐々木安彦と太田昭夫が作成した。なお、足立、菅生地区については、未踏査部分が多い。今後とも踏査を統一、追加・修正していく予定。

備考欄 ①県道跡地名表(宮城県教委: 1976)による。②村田町史(村田町: 1977)による。③佐々木、太田の踏査による。



村田河の弥生時代道路分布図

弥生時代研究会規約 1978年10月

- 第一条 この会を「弥生時代研究会」と呼ぶ。
- 第二条 この会は、宮城県の弥生時代の社会の究明を目的とする。
- 第三条 前条の目的を達成するため、次の事を行う。
- 1 個人研究、共同研究の協力、推進
 - 2 情報の交換
 - 3 機関誌の発行
 - 4 研究会・討論会の開催……必要に応じて
 - 5 その他、目的達成に必要なこと
- 第四条 この会は第二条の目的に賛同する会員で組織する。
- 第五条 この会の経費は、会誌の売り上げ、その他の収入でまかなう。
- 第六条 この会の事務所は当分の間、栗原郡瀬峰町藤沢下田216-73 佐藤信行方におく。
- 第七条 必要に応じ会員の賛同を得て、会規約の変更を行う場合がある。
- 付一 会誌の編集は、会員が持ち回りで行う。
- 付二 会員は、会誌の5部以上を引き受ける。

編集後記

昨年の10月に本会が設立されて早くも半年が過ぎた。まずは機関誌発行を活動の第一歩にしようと私達が編集を引き受けた。昨年内の刊行予定がこんなに延びてしまったことは私達の努力の至らなさにある。また、本誌に読みにくい点、不便な点があれば私達の不慣れな編集にその責任がある。

今回は、資料紹介、遺跡地名表など研究の基礎作業ともいいくべきものを掲載することができた。遺跡地名表は今後とも1市町村ごと作成し、紹介していきたい。また、石器集成、文献目録などの掲載も考えている。

本誌が宮城県における弥生時代の資料・研究の発表の場として多いに利用されることを切に希望する。次回発行は、会員の皆様のご協力を頼りにして今秋までにはと考えている。

なむ、創刊にあたって、興野義一氏、須藤一郎氏には資金面で多大なるご援助をいただきました。以下お札を述べさせていただきます。

(A.O., J.O.)

題 (MOMI) 創刊号

1979年4月10日 印刷
1979年4月20日 発行
発行 弥生時代研究会
事務所 栗原郡瀬峰町藤沢下田
216-73 佐藤信行方
編集 太田昭夫 小川淳一
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 電話 63 1166